

青春の記録 8 / わが青春のとき / 自伝と回想 /

青春の
時分 8



説 谷川健一

わが青春のとき

—— 自伝と回想

三書房

青春の記録

8

わが青春のとき

編者 谷川 健一

一九六八年四月一日 第一版発行

定価 四六〇円

発行所 竹 村 一

印刷所 同興印刷株式会社

製本所 有限会社 佐伯製本所

株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九

電話東京(二九一)三二三一―五番

振替東京八四一六〇番

©一九六八年

解説 283 谷川健一

コラム

砂漠にあこがれて	大野忠男	22
岩宿への道	相沢忠洋	73
わたしの白書	宮田文子	97
モンパルナスの秋	薩摩治郎八	126
曠野の花	石光真清	159
わが青春の告白	神近市子	241
青春物語	谷崎潤一郎	272

青春の記録 8

わが青春のとき——自伝と回想

I 自然をもとめて

青蜥蜴の夢

土方久功

大地に生きる

清水精一

履歴書

南方熊楠





青蜥蜴の夢^{とかけ}

ひじかたひさお
土方久功

土方久功は、明治三十二年東京に生まれた。学習院中等科をへて、大正十三年東京美術学校彫塑科を卒業。親類にあたる劇作家の土方与志や小山内薫らとともに樂地小劇場の創立に参加したりするが、昭和四年、二十九歳の時に南洋パラオ島へ渡航、十年間という長い歳月を島の人々と送る。その生活のなかから生まれた特異な作品の数々を、高村光太郎は「何の遠慮もなしに氏の幻想なり、南方の詩が、ある現代感覚のデフォルメを経て気持よく表現されており、はなはだいさぎよい」と評している。昭和十六年、太平洋戦争開戦の翌年に帰国、現在も彫刻の創作活動に活躍しており、著書『パラオの神話伝説』『文化の果にて』等がある。

昭和四年と言えば、今から四十年近くも前のことだ、その三月九日。前々日、横浜港を出た時には、薄曇って、内地の海はまだ寒々として、デッキにながく出てはいられないほどだったが、前日は雲が多いままに、どうやら晴れ、伊豆七島も遠くうしろにし、海の色も雲のただずまいも——ことに雲の姿は、東京では夏が近くならないと出ない、あの妙にまぶしい雲だった。そしてもう一日明けた九日は、朝から晴れわたり、日の光はどんどん強くなって五月のよう、そして海の色もあの夏の暖かい色になって行く。午後には小笠原島が、父島が過ぎ、母島も通り過ぎて夕方には再び島影がなくなっていた。

その朝である、昨日まで私たち、一等デッキの三人のほかは、二等客の十人ほどの人たちが、下のデッキにぶらぶらしていたのが、どこからあらわれたのか、男女、浴衣がけの人たちが沢山、甲板に現われたのにびっくりした。デッキ・ゴルフを教えてもらっていたパーサーに尋ねたところによると、あの人たちは沖繩からの移民ですと言う。南洋に出稼ぎに行く人たちで、沖繩で乗りこんだのですが、横浜あたりでは、あの浴衣姿では、寒くてとても出てこれないので、船底の三等船室にとじこもっていたのです。今日は朝からは

かほかと暖かくなったので、上にあがってきたのです。ご存じかと思いますが、沖繩の人たちは歌師が大好きで、誰一人踊れないという人がないほどなので、晩になると、あの人たちのいる船底は歌踊りでたいへんな賑やかさですよ、と言う。

私たちはもう、島影ひとつない大海のまんなかに出てしまつて、空と海よりほか見えるものはなく、昼間はデッキ・ゴルフをやるか、娯楽室で麻雀でもするよりほか、することもないので、この珍しい沖繩の踊りを、何としても見せて貰おうということになって……勿論OKです。

その前に、私たちの乗った、この南洋航路船は山城丸という二千三、四百トンの船で、もとドイツの何とかいう汽船だったのを、日独戦争で日本がぶんどつたものだそうで———そういえば、私たちがこの船で渡ろうとする南洋群島も、ドイツの委任統治領だったのを、日本がそのまま代替りして委任統治していたのだった。大きな船ではないがドイツらしいがっちりしたなかに行きとどいた設備のととのつた船だった。ところで、もうひとつ、この立派な客船の一等室に乗っていたのが、何と申しあわせたように、三十歳に届かないような、いわば書生っぽが三人だけというさびしいものだ

つた。

一人は芝浦電気の伊藤さんという若い社員で、これからパラオに電話をひきに行くのだという。で、二等の方に助手を二人連れていたが、やつと三十歳そこそこの若い、まことにおとなしい技師さんだった。そしてもう一人は、ポール・ジャックレイさん、といえ、あの人かと思うかたがあるかも知れない。というのは、私も敗戦後、大分たつてから週刊誌だったか、テレビだったかで偶然その消息に接したのだった。軽井沢に居られて、本業の方は聞きもらしたが、日本で有数な蝶の採集家として、その標本と共に紹介されていたから、その方面に興味を持たれる方々ならば知つて居られるかと思う。お父さんが古くに日本に来られたので、このポール君は、もつと若い、やつと青年になったほどの人のように思えた。日本語がべらべらで、いや、それどころではなくて、義太夫を習つていて、三味線（ふとぎを）まで弾けるという人であり、絵も描くという人だった。だから沖繩の踊りを見ようということになつても、芝浦さんよりも一層熱心だったのである。今では、ラジオ、テレビ、その他の報道や交流で、また内地に來ている人も非常に多くなつていたので、沖繩のこともよく知れわたり、沖繩の人たちがすっか

り身近なものになっているが、半世紀前には、沖縄といえは半分ぐらい外国的な風土のように思われていたのである。

さて、せっかく見せてもらうのだったら、少しは説明が聞けたらと——沖縄県でも学校では標準語で習っているから、若い人ならば聞くことも話すことも出来るということだったので、若者を一人選んでもらって通訳してもらったのだった。上原君という青年だった。日本酒の一升罎をもって船底に案内されて行った。真暗な階段を降りると船底の三等船室の臭気がぶーんと鼻をついたが、それはじきに馴れてしまふ。薄暗い電燈の下に十五疊位の、畳敷きの低い台があつてお酒もりの場所になっている。男の人ばかり十五、六人が台の三方に折れまがつて跌坐をかいて居り、各人の前には湯呑に焼酎だろう——冷酒がつがれていて、時々手にしては着なしにちびちびと飲んでいる。一人が沖縄特有の蛇三絃を弾き、他の一人が片皮の小太鼓を打って拍子を取り、そして別の一人が踊っていた。他の連座のものは歌を唄いながら手拍子をうって景氣をつけている。他の都は二段の柀座敷になつて居り——これが二人ずつ位の寢所でもあらう——女たちはこの柀座敷から見物し、小声で唄い合せていた。

女も踊るそうであるが、男の方が普通に踊るらしい。私たちが見た時は、男ばかりで、女は踊らなかつた。男たちは誰でも踊れるらしく、かわるがわるに蛇三絃や太鼓を持ちまわし、踊手も次々に代りあつた。

彼らは事につけて踊るようだが、特別の踊りの期節は五月四日、五日と旧の八月十五日、十五夜の晩だ。五月四日には一村（漁村）挙つて盛んな競舟がある。この競舟が何の神事に起つたものか詳かにされなかつたが、私に話した若者は笑いながら、勝つたものには賞品があるといつただけだった（これは長崎のペエロン競漕とおなじものである）。私が行つたパラオの島民たちも、ほとんど同じようなカペーケル大漕舟の競漕をもつていた。

この競舟のあと、翌日は終日、男女海岸に群集して踊りが催されるところのこと。踊りは、盆踊りあるいは歌垣などのように一同で踊るのではなくて、衆人の歌囃の中に一人一人出て踊るのだという。踊りたい者は数日前から年長の者に教えてもらつて盛んに練習する……彼らの踊りは種々であるが、かなり技巧的で、感興次第で即興的に演じられるものではない。彼らはまったく踊りがうまい。私が最初に見た踊りは支那楽のようなく、いくぶん哀調のある歌——しかしテンポはとても

早い——に賑やかな囃^{はし}がはやしたて、踊手は長いあいだを、初めからしまいで、軽いスタッカートで、スパニッシュ・ダンスのあるもの、あるいは感興の権化のような、躁急なジブシーの踊りを思わせる踊りをおどる。クライマックスが来る度に囃手の中から一斉にピ、ピ、ピ、ピヨ、ピヨ、ピヨと口笛がそそりたててるように鳴る。それは実に効果的で、踊り手は快くうかれて一段と踊りに精気が加わるのである。この口笛は一本の曲げた指を口にくわえて吹き鳴らすあれで、三四人が一斉にやると苛立^{いらだ}たしくらいだ。

それから一人の男は女に扮して、ある結髪のように頭に布を巻きつけ、余りをながくうしろにたらし、しなやかな手ぶりを上手に踊った。私は、これは女の踊りを男が踊ったのかと尋ねてみたが、それはまったく男の踊りなので、女はこれを踊らないとの事だった。これは面白いことだと思った。

それから男と女（これも男が扮した）との二人の踊りもあったが、これは男が女のところ忍んで行くところだと説明された。それからある踊りは、荒々しいしぐさで恐ろしい顔つきで踊られたが、これは仇うち^{あいつ}の踊りだという。一般に彼らの踊りは、長い叙事詩的な唄につれて、その文句の内容を踊りに表わして居る

ようだが、説明以上に叙情的だ。これは内地のいい踊りと共通する。彼らの踊りにはしっかりした型がある。けれども彼らは型以上に情熱で踊る。彼らは踊る時は実に一所懸命だ。

それから一種変わったもの、歌なしの、囃だけに合せて拳闘あるいはカヲテの型を踊るのがある。日本の剣舞のようでもあるが、全然物語りは含まれず、力と型とを叙実に表わしたもので、いろいろの型があるらしく、三人ばかりが代る代るやったが、皆それぞれ違った型で、どれもみな真剣な、恐ろしいような真面目なものだった。これは確かに護身術を覚えるための「武器踊」とか「喧嘩踊」とかに属するものだ（その後、十年間にバラオにも沖繩の人たちが、どんどんふえ、料亭も進出し、料亭に芸者たちも渡って来て、バラオで沖繩の歌、踊は、古典ものから俗謡的なもので、いつでも見られるようになり、私は沖繩舞踊のファンになつてた）。

ずいぶんと物知らずな、昨日日本にきた外国人の日本舞踊見物記のようなものだが、半世紀前の、それも物知らずな青年の、はじめての沖繩舞踊見物記として稀少価値があるかも知れないのと、これから所々に出てくる当時の記録だの感想だのと照応するものがあると

思うので、写してみた。

何を、どこまで書くというものでもないのです、もうすこし、南洋おのぼりさんならぬ、おくだりさんぶりを紹介しておこうか。

十二日の朝サイパン島に着いた。沖縄の一回はここ降りたようだった。船が港に入ると、海の色が沖合いとはまた、がらりと変って、それは美しい極致と思われた。碇をおろした所は、まだかなり深みではあったが、それにも拘らず海の底まで見とおしなのだった。水はあくまで青く、その青さは澄みきったウルトラマリーンで、高いデッキからのぞこむと吸いこまれるような——これは色というよりは光だった。というのは、サイパンの浜砂は、珊瑚砂なのだろう、真白なのである。そして真夏という光が真上から落ちて跳ね返るので、陽炎がゆらゆらと揺れるように眼を射るのだった。そんな白い砂が、この、どこまでも透明な海水を透して、深い底から照り返しているのである。デッキから見おろしていると、そのガラスのようなウルトラマリーンの奥に、黒い魚の影がたくさん泳ぎまわっている。一人二人の船員さんが大きな糸を垂れて釣りをはじめた。じきに手ごたえがあったようで、釣糸がどんどんたぐられると、あの小さな黒い魚がひらひらと、しょ

うことなしに上がって来たが、水をはなれるのを見てびっくりしたことに、それは真赤な大魚で、三十五センチから四十センチはある鯛のような魚だった。だが船員さんは針はずすと、その大きな魚を海に投げこんでしまった。それは毒があつて食べられない魚なのだという。手ごたえが大きく、面白いので、遊び半分に釣ったのだった。

内地の三月はじめから一足とびに真夏の日照りの、それも真白な砂土に照り反るまぶしい光の中に来たのだから、ひどく暑かったが、珍しさが先きで、十時頃か、ランチが出るというので伊藤さん、ジャックレーさんと、まずは上陸した。ジャックレーさんは何か用たしに行くとして別れたので、伊藤さんと二人で山に登ってみたが、道をまちがえてしまつて失敗。茶屋があるわけではなし、井戸のある人家などあるわけもなし、なにしろ暑くて喉がかわいてやりきれないところへ、チャモロ族でない方の、カナカの子供が二人、腰に開裂刀をさげているのに出合つたので、早速椰子の水を飲ませてくれないかとたのんでみた。畑まで行けばあると言うので、子供たちについて行き、やっと椰子の実第一号にありついたのでした。子供たちはするすると椰子の木に登り、青い実をもぎとっては投げおとし、

降りて来て、刀で外皮の一部をそぎとって、中の実に穴をあけて飲めるようにしてくれた。なにしろ喉がかわいていたので、そのうまかったこと。すっかり椰子水党になったのだった。

次の日も朝から上陸した。

ランチに乗って陸の方へ向って行くと、向うから帆をあげて走って来る小さな沖繩漁船に乗った一人が、こちらにむかって、手を高くあげて振っている。それがすれちがいきまに見えた、その若者が、昨日山城丸から下船したばかりの上原君だったのに驚いた。それをいうと、船の人が説明してくれた。沖繩の人たちは親類も多いが、県人会ががっちりしていて、受け入れ態勢がととのっているので、若者たちは上陸したその日からでも、持ち場を与えられるようです、と。

だが、後に、バラオに着いてみると、必ずしも沖繩ばかりでなく、全国的に県人会の組織はあって、なかなかスムーズに同県人を受け入れ、世話しあっているのだった。ただ、私たちの東京府人会というのだけがなかったのだった。

昨日沖繩の人から開いていた、この辺のチャモロ人のお金持ちの家の前を通ったら、ウェランダにフィリッピン式の、あの蟬の翅のような薄ものの衣服をつけ

た女が三人出ていたので、下から声をかけて、東京から来たものだが、あなた方固有の料理を食べてみたい。食べさせてもらえないだろうかときいてみた。お昼は間に合わないから、午後四時に来てくれという。しめた、と思ったが、ぜひパンの実というのを食べさせてほしいといったら、パンの実はまだすこし時期が早くて食べられるように大きくなっていないから、辛でよかったです拵えておくという。いささか落胆したが、よろしくねがうといったら、おかしは何がいいかという。それこそあなたがたが食べるものなら、何でもいさら、なるべくあなたがた本来の料理を食べさせてくれたのんでおく。

郵便局の瀏さんという人に内地から紹介を貰って来ていたので、昨日はちょっと寄って見たら、郵便物が山のように入って忙がしくしていたが、明日——というのが今日の昼に官舎に来てくれとのこと、厚かましく伊藤さんをつれて行った。そしてビールでお寿司を馳走になったので、おなかをへらしておかなければというので暑いのにぶらぶらと歩きつづけた。海岸には順々にカヌー小屋があるが、カヌー小屋毎に何人かのカナカ人が、昼寝をしていたり、お喋りをしていたり……その三つめだったかのカヌー小屋に日本語の上

手な若者がいた。名前を尋ねたら、サイパン病院の院長さんが吉文^{よしぶん}とつけてくれた、ヨシジョーといえは誰でも知っているという。大正十四年、上野に博覧会があった時、東京に見物に行つて来たそうで——南洋群島の各地から毎年何人かずつ、観光団を組んで日本内地につれて来ていたのである。——一番こわかったのは、汽車に乗せられて、山の下の暗い穴の中を通つた時だったそうだ。

四時前に、さっきのチャモロの家に行く。大きな食堂の大きな食卓に次から次といろんな料理が運び出され、一番若い蟬の翅の娘が一つ一つまじい日本語で説明してくれた。私は内地で松岡静雄氏の『チャモロ語の研究』を読んでいたのだが、これはとても役にたたなかった。言葉というものはやはり耳でおぼえたものでなければ話にならない。

とうもろこしのパン。とうもろこしとホノルル芋がチャモロの主食なのである。とうもろこしの汁にコブラーをしぼりこんだ、くず湯のような飲みもの。これは何杯でもおかわりが出来るので、ポットに沢山とつてある。おかずは牛肉の煮こみ。牛の肝臓の煮たもの。牛の心臓の焼いたの。三尺バナナと鶏肉を煮たもの。トマトと魚の油煮。魚肉の椰子油揚げ。三尺バナナの

煮たもの。さつまいものふかしたの。それとごはんまで焚いてあった。たいへんな御馳走だったが、調味料が少ないせいとか、どれもこれも淡味で変化にともしい。なにしろ沢山あるので、たくさん食べて満腹した。何でも見てやろうというのがちよつとはやつたが、何でも食つてやろうというのが、ひどく変わった土地に入りこむ秘訣のようだ。私は土地のものを何でも食べて、土地になじみ、病気をせず、精神的にも朗かだつたように思う。実際、後にパラオのような日本人の沢山入つた所で、官庁や商店に来た人の中で、十日から二週間ぐらいで、病氣になったり、ホームシックになつて帰つてしまふ人が時々あったが、そういう人はいがい土地の食べものになじまないで、ごはんと缶詰ものばかり食べた人のようだ。

サイパンから、もう一人一等船客が乗りこんだ。この人は佐久間さんという、南洋庁のお役人で、判任官の制服を着て乗りこんで来た。農林課の人で、サイパンに出張していたが、仕事を終えてパラオに帰るところだったので、この人をつかまえてパラオのことを根ほり葉ほりきいたのだったが、やつぱり実感のようにはいかなかったようだ。見ると聞くとは大違いと俗にいわれるが、本当だと思う。

さて、勝手なところから書きはじめたが、四十年前にしろ、二千四百トンという客船に一等船客がたった三人、それも三十歳にもならないちんぴらばかりという乗り合わせは、今時ではないこと。ことに、その中にまだ、世間様から収入といえるようなものを得たこともない、書生つぼの私がまぎれこんで居たのかという次第を、ちよつと説明しておこう。実はそれが、この話の主題なのだから。

まず——少々ならず青つちよろくしてお羞かしい次第だが、これより一年ほど前の帳面に次のようなものが書いてある。

私が生まれた東京よ

私が育った東京よ

繁華な都会よ 雑踏の巷よ

親しい友だちよ 骨肉よ

お別れの時が来たようだ

ずいぶん永い間の交情だった

そして私はともかくもお前から受取ったものに対し

ては

それだけの恩顧と感謝を忘れるものではない

これからさきも閑かな追憶の靄の中に

ある時、もの悲しいようなゆうべの砂浜で
永く永くお前を思いだすことがあるだろう
だが 私は今は立たなければならぬ
私は青い海に浮かび出たいのだ

青い海は私を未だ知らない 懐しい——
何処へでも私をつれて行ってくれるだろう
さて 私はじきに青い海に浮かび出るだろう
北へか？

昔 古代ギリシャの頃には世界の遙か北の果に
高い山々の彼方に久遠の春と祝福があつて
そこに幸福なる——ハイパーボレアズが住んでい
た

だが今ではハイパーボレアズさえ凍えてしまった
らしい

否 たとえそこにどんな詩があるにしても

私の血は北方の永い冬の窒息には堪えないだろう

そこで私の血は常夏の南へと憧れる

その南の青い海にうかんでいる小さな島は

私のために暫くの好ましい生活と それから

私のために静かな墓物とを用意してくれるだろう

そこでは大王椰子の木が高く天にかざして

すこしの風にその高い葉先をさらさらと鳴らすだろ

う

そこでは乾いた砂地に何処までも どこまでも

あの太い根をぶすぶすと突刺して蝸の木が育つたら

う

そこで私は裸の黒ん坊を見るだろう

そこで私は黒ん坊の若い娘たちと知り合いになるか

も知れない

そしてもしもその娘の顔形がふしぎにも美しかった

ら

その娘はもしかすると彼女のおじいさんから

スペイン人の血をもらったかもしれない

私たちはきれいな泉のほとりか 椰子の木の葉蔭で

金色の水々しいババイアか 滴るマンゴーの甘露を

吸って

暑い昼時を休み まどろむかもしれない

そんな時 私たちはお互の生まれについて話したり

あるいはお互の知識を交換したりするかもしれない

彼女はこんなふうに話したすかも知れない

『アヌ——それは全であり 本資であり 無限の天

がその身であつた

アヌ——全であり本資である——はその妻悲哀の地

球とねた

彼女は総てのものの母 御祖なる海 ヤアを産んだ

アヌ——その神性は尽きない——は身隠れた

地球は永遠の悲哀の底に沈んだ

ヤアは自分の衷なる母性とねた

彼女はウツなる太陽——唯一の王である——と

水なる海アダとを産んだ

阿克——火は唯一の王なる太陽 ウツの子である

火 アクはその妻としてタスムを娶り

ウツなる太陽と共に我々の祖先となつた

けれども我々の祖先は遠い

ウツは自らを外界の女王と呼ぶ女とねた

彼女から白い雲と黒い雲と黒い雨とが生まれた

ウツは自らを内界の女王と呼ぶ女とねた

彼女から虹と光と赤い雲 赤い雨とが生まれた

下々の神々が其々の使命を負わされた

シェーチは南風を司り

アダッドは雷と暴風とを

そして総ての戦闘とを司る

シン——月は暗黒と夜とを治め

エスターは金星によって愛を護り

エンリルは地に居て精霊をみそなわし

かくして総てのものの本源は そこから